

現代複合動詞前項と後項の意味の関係

— 「～出す」を対象として—

高原 瑞穂

1. はじめに
2. 後項「～出す」の意味分類
3. ①主体の空間移動と②対象の空間移動における前項動詞
4. ⑤開始の前項動詞
5. ③顕在化と④今までなかったものを出現させるにおける前項動詞
6. 「～出す」における前項動詞
7. まとめ
8. おわりに

1. はじめに

これまで複合動詞を対象とした多くの研究が行われてきたが、分類方法、観点なども研究者によって様々で、体系的に完成するまでには至っておらず、研究途上といえよう。前項と後項の意味の関係については、これまでの研究でも多く触れられてはいるものの充分ではなく、その関係をこれまでと違った観点から考えてみることで、今まで分からなかった複合動詞の一側面が見えてくる可能性も十分にあり得る。

今回は、「～出す」という複合動詞を一つのモデルとして取り上げ、分析を試みた。「～出す」という後項動詞は、「外部への移動」という単独用法に使用される意味の他に、「動作や作用の開始」といった単独動詞「出す」にはない意味を持っているが、「～出す」の複合動詞一つが一つの意味しか持たない訳ではなく、使われる文脈によっては「外部への移動」となったり、「開始」の意味になったりする。このような多義的な複合動詞後項「～出す」をいくつか分類し、それぞれの分類ごとに、前項動詞の単独動詞との意味用法の違いと複合動詞化して初めて生まれる意味用法に注目していく。そして、後項動詞「出す」の意味と合わせて分析していくことで、複合動詞の前項、後項の関係を見ていきたいと思う。

なお、分析で使用した「～出す」の複合動詞は、『新明解国語辞典』第四版、『岩波国語辞典』第四版の中にあつた83語を使用した。

2. 後項「～出す」の意味分類

複合動詞後項「～出す」を扱った論文はいくつかある。主なものとしては、一番最初に「～出す」の分類を行い、後の分類の核となった姫野昌子氏の論(1977)がある。その論の中で、姫野氏は「～出す」の意味を大きく二つの分けている。一つは「出す」の基本的意味でもある「外部への移動」、もう一つは「動作や作用の開始」である。さらに「外部への移動」を細かく「主体

の外部への移動」、「対象の外部への移動」、「表だった場への出現」、「顕在化」としている。それぞれの分類の中でさらにそれを細分化し分析を行っているが、ここでは省略する。その論を踏まえて分析を行った田辺和子氏（1983）、呉美善氏（1983）などがある。田辺氏の分類はかなり細かく、姫野氏が「動作と作用の開始」と一つにしているところを、「一般的な動作動詞」「漸次性をもつ動詞」の二つに分け、さらにアスペクトによって別の分類をたて、「瞬間動詞と結び付いて複数主体による同一動作の連続の開始」、「継続動詞と結び付いて複数主体による同一動作の連続の開始」という分類を行っている。呉氏の分類は、姫野氏はほぼ同様であるので省略する。

今回の目的は後項「～だす」の分類にある訳ではなく、また、これまでの分類にあまり検討の余地もないと思われるので、姫野氏、呉氏が行った五つの分類を使って今回の分析を行った。田辺氏の論では、アスペクトについて細かな分類がなされているが、あまりに細分化すると複雑さを増すだけであるし、アスペクトについては扱いが難しいので、今回はとりあえず細かなアスペクトまで含めず、分析をしてみた上で必要性が出てくれば、次の分析で考えていきたいと思う。。

①主体の空間移動

主体自らが空間移動し、本来他動詞である「～だす」が自動詞化している。

②主体の動作による対象の起点からの移動

主体の動作によって、対象を他の場所へ移動させる。

③顕在化

主体の動作によって、隠れていた対象を表面に出す。

④今までなかったものの新たなる出現

主体の動作によって新しい物事を出す。

⑤開始

単独動詞「だす」本来の意味が失われ、接辞化して開始の意味を表す。

この分類に沿って、二つの辞書から収集した「～だす」の複合動詞83語の分類、そして意味分析をしたが、文脈によって意味が変わる場合は分けて考えたので、同じ複合動詞でもあっても複数の分類に分けてあるものもある。

3. ①主体の空間移動と②対象の空間移動における前項動詞

この①主体の空間移動と②対象の空間移動は、①は主体そのものの動作で自動詞、②は対象となるヲ格を、主体の動作によって空間移動させる他動詞であるという違いだけで、動作的な意味である「空間移動」という点では同じであるので、合わせて考えていきたいと思う。

まず、ここに分類される「～だす」は、「～してでる」(①)、「～してだす」(②)と言い換えられるものと言い換えられないものと分けられる。言い換えられないものは、意味、用法などによってさらに細かく段階付けられる。(例文の前についている番号は分類の番号である。他何例と書いてあるもの以外は、その分類にあてはまるすべての用例をあげておく。)

I. 単独動詞の意味そのままの前項動詞

- (1) 弟を連れ出す
= 弟を連れて出る
他：駆け出すなど12例
- (2) チューブから押し出す
= チューブから押し出す
他：いびり出すなど42例

(1)と(2)それぞれの例を上げたが、空間移動の意味を持つ「～出す」の前項動詞の大多数を占めるものである。「～して～」と言い換えられる、いわゆる単純な「動詞+動詞」の意味しか持っていない。寺村秀夫氏(1969 p43, 44)は、このような複合動詞を「単に二つの動作が連結して表現されているもの。その各部分は自立語として使われる場合の意味を保持しており、「走ッテ去ル」「持ッテ上ゲル」というのと大差ない。」としており、姫野氏や、呉氏も「～して～」と言い換えることによって分類を行っている。これが複合動詞の一番基本的な形と考えてもよいだろう。

II. 用法の変化している前項動詞

- (2) ひざを乗り出す
≠ ひざを乗って出す
他：手を差し出す、話を持ち出す

(1)では一例も見られなかったが、(2)ではいくつかあったもので、単独動詞として使われる時と用法が変わる。

ここに例として上げた、「ひざを～」の場合「～して～」とは言い換えることは出来ない。この例文における前項「乗る」は、何か乗り物などを動かしたりする意味で使われているのではない。単独動詞の「乗る」には、比喩的な「“そこへ位置することによって、ある特別の状態へと身を運んでしまう”という状況に入ること」(『基礎日本語辞典』 p918)という意味があるが、複合動詞前項の「乗る」も「ある状況に身を置こう」とする主体の気持ちが表面に出て「ひざを前に出してしまふ」程であるということと考えられる。

しかし、比喩的な意味を表す場合の「乗る」は自動詞であるのに対し、複合動詞「乗り出す」の前項は、「ひざを」というヲ格を取る他動詞になっているため、意味的には近いが、単独動詞の用法と同じであるとは考えられない。

III. 単独動詞で使われない意味が残っている前項動詞

- (2) 身を投げ出して社会に尽くす
≠ 身を投げて出して社会に尽くす
他：会長に知事を担ぎ出す

(1)では一例も見られなかったが、(2)でも二例と少なかった。

単独用法の「投げる」の場合、「身を～」の文で用いると「自殺する」というマイナスイメージの意味になってしまい、複合動詞前項が持つ意味とは明らかに違ってしまふ。単独用法の「投げる」にも「提供する」という意味があるが、現在はあまり使われず、「私の全財産を投げて人々を助ける」としてみて

も、何となく違和感がある。この「提供する」というプラスの意味は、単独用法の中では使われなくなったしまったが、「投げ出す」「投げうつ」などのように、複合動詞としてはその意味を充分に残していると考えられる。

IV. 現代では使わない動詞が残っている前項動詞

① 欄外にはみ出す

② おとりを使っておびき出す
他：選挙に駆り出される

①の「はむ」も②の「おびく」も単独動詞としては存在しない。「はむ」は古語としては存在しており、現代の辞書にも記述はあるものの単独では使われていない。姫野昌子氏（1977）は「はむ」を無意味形態素として扱っている。「おびく」も古語としては存在していて、昔は「おびく」一語で表現してきた意味を、今は「おびき出す」「おびき寄せる」といった複合動詞になって担っていると考えられる。

V. 意味の比喩化が起こっている前項動詞

① 表舞台に踊り出す

≠表舞台に踊って出る

他：町へ繰り出す

本が本棚から一冊飛び出す

② 警察に突き出す

≠警察に突いて出す

他：軍勢を繰り出す

外国製品を締め出す

言うことを聞かない

やつはつまみ出すぞ

費用を弾き出す

預金を引き出す

再生の一步を踏み出す

①の「踊り出す」は、「表舞台に～」の文脈から考えると、単独動詞の意味の中に「踊り出す」の前項と同じ意味はないようだ。ここでの「踊り出す」は動作そのものというよりは、「まるで踊りながら舞台に出てくるように」つまり「脚光を浴びる場所へ出る」といったように比喩的に意味を変化させているように思われる。

②も単独動詞の意味の中には、「警察に～」の場合の複合動詞「突き出す」の「突く」の意味に近いものは見られない。「警察に～」の場合には、「強制的に連行する」といった意味の一語になってしまっているようだ。複合動詞前項「突く」の意味は、「強く押す」ようにして「警察へ出す」といったように比喩的に使われているのではないか。また、姫野昌子氏（1977 p 84）は「友情物を（当事者の意志とは無関係に）表だった場へ引き出すことを表している。「召し出す」場合は権力者の前に、「突き出す」場合は警察にと、その場が限られている。」としている。

このような比喩的な意味のある後項（例えば「書き殴る」、「聞き届ける」、「咲き誇る」など。前項は少数としている）があることは、中村その子氏（1992 p 75, 76）の指摘がある。

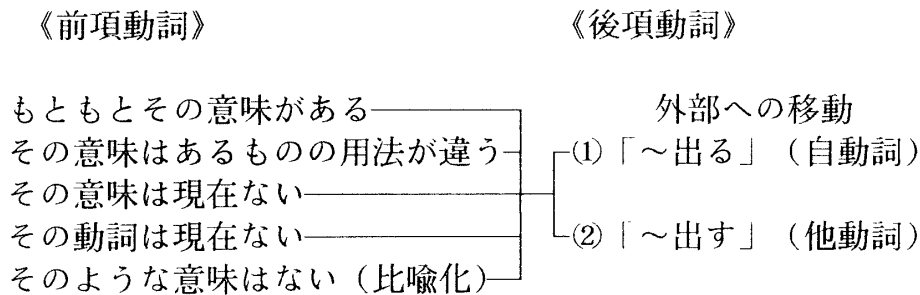
VI. 特殊なもの

② お弁当を仕出す

「する」という動詞は他の動詞とは違い、文型によって個別的な意味が生まれてくるため、一般動詞を前項に持つ他の複合動詞とは区別するべきであろう。

ここまで「外部への移動」の前項動詞を分類してきたが、ここで全体像を考察してみたいと思う。

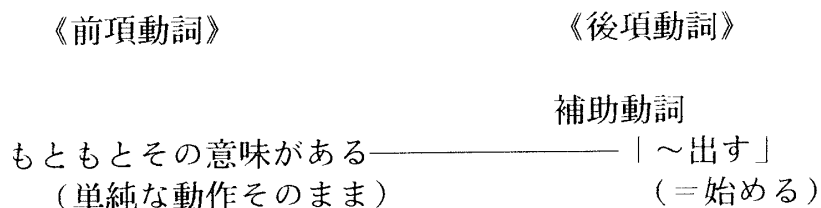
後項「出す」が単純な動作「外部への移動」の場合、前項動詞となる動詞の性質にバリエーションがあることを指摘してきた。



単純な動作+動作のものが数量的には多いものの、前項動詞にくることが出来る意味は多様で、動詞の原義ともいえる動作から離れて、比喩的な意味をもつものもいくつか見られた。後項の「～出す」が、原義とも言える「外部への移動」に分類された前項動詞には、幅広い意味（動作～比喩的なものまで）、用法（取る格の変化）、語（現代語～古語まで）がなり得ることが分かった。意味のバリエーションがあるとはいっても、前項になり得る動詞は、ある程度限定されていて、動作的な単独動詞そのままの前項においては、後項の「移動」につながる動作を持つ動詞しか前項にはなれない。また、その他の単独動詞の用法、意味を失っている前項動詞においては、「出す」と結び付くことで、前項動詞が変質しているため、前項と後項の固定度は強く、一語的で、かなり限定された動詞しかくることが出来ない。

4. ⑤開始における前項動詞

後項「出す」が補助動詞となった場合は、石井正彦氏（1987 P289）の指摘もあるように、前項動詞の動作そのものが「出る」（＝始まる）と考えられる。前項動詞は「動作」という役割を担っている為、前項には単純な動作しかくることが出来ない。



補助動詞「～出す」は、前項動詞に、単純な動作そのものの意味の動詞しか取ることが出来ない。この⑤に分類された補助動詞「～出す」の複合動詞は、造語力があり、前項と後項の意味的な結合度は薄く、動作の意味を持つ動詞であれば、ある程度の動詞は前項になり得ると思われる。

5. ③顕在化と④今まで無かったものを出現させるにおける前項動詞

この③と④に分類される複合動詞の前項は、「隠れていた物事」と「新たな物事」という違いはあるものの、その前項動詞の性質はもともとの単独動詞の意味の中にそれぞれ「隠れていた物事を明らかにする」(③)、「新たな物事の出現」(④)という意味があるか否かで二つに分類出来るという点では同じである。③はさらにその方法で細かく分けられる。

まず、③の顕在化から見てみよう。

I a. 表にあるものを落として、隠れていたものを見えるようにする

洗う、剥く、掘る

I b. 自分の中で無自覚なものを、意識の上でとらえようとする

思う

I c. 外界のある事物を五感で知覚し、意識の上に潜在化する

嗅ぐ、聞く

2. 対象を細かく分割する

切る、割る

3. 対象を自分の方へ引き寄せる

誘う、引く、引きずる

1 a～1 c に分類される複合動詞の「隠れていた物事」を明らかにする手段には、前項動詞の意味が大きく関係していると思われる。

ここで問題となるのが、2の「切る」、「割る」、3の「引く」、「引きずる」である。「切る」、「割る」には、表面上は「隠れていた物事」を表面化させるという意味がないように思われる。しかし、「切る」の場合、もともとの単独動詞の意味に比喩的な「口を切る」、「封を切る」のような「“入り口を切り開くことによって物事が始まる” “物事の最初としておこなう” 意識」(『基礎日本語辞典』 P 379)が存在しているため、「用件を切り出す」と複合化した時の前項にも、「物事の始まり」として用件を話すことを始める(=切る)とい意味が含まれていると考えられる。「割る」にも、「卵を割

る」のように、分割行為は結果として、“中に隠されているものを表し、引き出す”ことにつながる。」（『基礎日本語辞典』 P 124）という意味があり、「口を割る」というような比喩的な言い方があることを考えると、単独動詞の「切る」にも「割る」にも「隠れていた物事」を明らかにする手段が含まれていて、やはり 1 a～d と同様に、前項動詞の意味が関係していると思われる。

しかし、「誘う」、「引く」、「引きずる」には、1 a～2 のような「物事を明らかにする」といった意味はない。後項の「出す」と複合することによって初めてその意味を生む。「誘う」、「引く」、「引きずる」という動作によってなされる「主体の意志によって、対象を自分に近づける」つまり、「あるところから、自分の方へ移動させる」の後に、「出す」という「表面に移す」動作がくることで、「隠れていたことを明らかにする」という意味に転成させている。

では次に④を見てみよう。

1. 「新しい物事を出現させる」という意味が既に含まれている

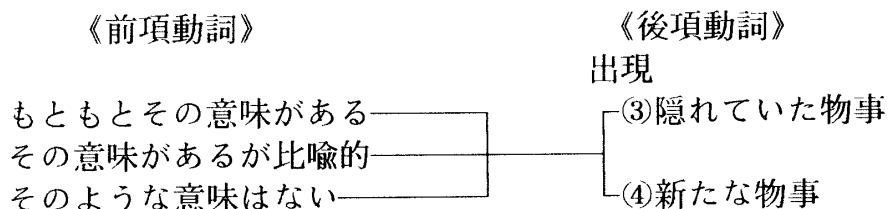
生む、描く、書く、かます、考える、作る、（見る）

2. 「新しい物事を出現させる」という意味が含まれていない

編む、打つ、ひねる

1 に分類した中で、「見る」は他の 1 に分類した動詞とは少し違う。奥田靖雄氏（1983 p 106）の指摘があるように、「見る」の「新しい物事を出現させる」の意味は、発見の対象のヲ格とありかを示すニ格が揃って初めて生まれるもので、他の語はそのような限定を受けていない。

2 に分類した三つの動詞は、単独動詞としては「新しい物事の出現」という意味をもってはいない。後項「出す」と結合し、新たな意味が加わることによって初めてその意味が加わる。



「もともと意味がある」というのは、「隠れていた物事の出現」や「新たな事柄の出現」の意味を、単独動詞の時からもっているということで、「比喩的にある」というのは、比喩的な使い方をした時に、単独動詞にもその意味があるということである。どちらも、単独動詞でもその意味をもっているということで、同じものとして考えてもよかったが、多少違いがあるので分けておいた。また、「そのような意味はない」というのは、後項「～出す」と結合すること

で、後項「出す」の意味の影響を受けて初めて生まれる意味で、単独動詞にはみられない意味である、ということである。

また、前項となり得る動詞は、「隠れていたもの」「新しいもの」を表面化させる手段を持つ動詞、あるいは、単独動詞にはそのような意味はないものの、「出す」と結び付くことでそのような意味を帯びるものでなければならぬために、かなり限定されていると考えられる。限定されているという点では、①②の「外部への移動」を同様であるが、前項のバリエーションが多い分、数量的には①②の方が前項となり得るものが多い。

この「隠れていた～」と「新たな～」の意味の「出す」は、単純な動作「外部への移動」から補助動詞「し始める」への意味変化の中間であり、一見意味的に離れていると思われるその二つの意味を、一連の意味過程につなげるものとなっている。前項動詞も後項動詞と同じように、「外部への移動」ほどバリエーションはないものの、「し始める」ほどの限定はなく、その二つの性質の中間に位置しているものと思われる。

6. 「～出す」における前項動詞

ここではこれまでの結果を踏まえながら、「～出す」という複合動詞の全体像を明らかにするために、前項と後項の関係について考察していく。

ここまでの分析で、前項動詞は、後項「～出す」の意味分類によって違いがあることが分かっている。つまり、前項動詞と後項動詞は相互に連動していると言ってもよいだろう。

後項「出す」の意味	前項動詞の質	前項動詞と なれる動詞の数	後項動詞の 動作性
外部への移動 ①「～出る」 ②「～出す」	+	±	+
出現 ③隠れていた物事 ④新たな物事	±	—	±
開始 ⑤し始める	—	+	—

＋、－、±という記号で前項動詞の意味用法と後項動詞の動作性を表してみた。単独動詞そのままの「外部への移動」の場合、前項動詞の質はバリエーション（単純な動作～比喩的なものまで）があって、その結果前項動詞の量、つまり数的に多くの動詞が前項となり得る。ただ、数的に多くの動詞が前項にこられるのは、単純な動作＋動作の複合動詞の場合だけで、動作以外の前項は意味的な繋がり、文法的な繋がりが強いため、かなり限定され、多くの動詞が前項にはなり得ない。「し始める」の場合は、前項動詞には単純な動作だけしかく

ることが出来ないが、動作を表しているものであれば、ほとんどの動詞が前項となり得るため、前項動詞の数は+になる。後項動詞の動作性は、補助動詞化してしまったためなくなってしまっている。

「出現」は、前項動詞の質も、後項動詞の動作性も「外部への移動」と「し始める」の中間の段階にあり、意味の移行途中にある。前項動詞の量は、もともとの意味に「出現」の意味があるもの、もしくはもともとの動詞に出現の意味がなくても、「出す」と結び付くことにより「出現」の意味を生むものでなければ前項動詞となり得ないので（もともとなかった「出現」の意味は、「出す」という動詞の活性によって生み出されるものであるが、前項の動詞の意味の在り方によって決まってくるので、結び付かない動詞の方が数多い。）多くの動詞が前項にくることはないと考えられる。

ここで結論として述べたことに関連があることを、中村その子氏（1993）が指摘しているので簡単に触れておく。中村氏は、V-V、V-v、v-V、v-vの四つのタイプの複合動詞を収集し、それらの複合動詞をそれぞれ前項使役化（前項を「～せる、～させる」）、前項受動化（前項を「～れる、～られる」）、前項敬語化（前項を「お～になる」）、前項のテ形変形（「～して～」）、後項削除、否定の効力範囲という六つの条件にあてはまるか否かで前項と後項の固定度を分析し、結論として、後項がアスペクト化した複合動詞は全体の固定度が弱く、複合動詞全体、または一部の慣用度や比喩化が高まると、全体の固定度も強くなるとしている。つまり、固定度が弱いということは、取る動詞の制限が弱く、ある程度の数の動詞が前項となり得るが、逆に慣用度が強いということは、取る動詞に制限があり、意味的なつながりも強く、あまり数多くの動詞が前項にはなれないということである。

今回のこの「～出す」の分析は、中村氏とは方法が違い、意味の面から複合動詞の前項と後項の関係を分析したが、中村氏の複合動詞の形態から分析と、結論として出したことは相反しておらず、前項と後項の固定度という点においては、同じ結論に達した。結局、その方法や観点到に相違があっても、結論として導いたことは同様のことであった。

7. まとめ

ここまで、後項「～出す」の前項動詞について考察を加えてきたが、後項動詞の意味と連動して、前項動詞の意味の範囲が変わってくるのが分かった。後項が、動詞の一番基本的な意味となる「動作」の場合は、前項動詞にバリエーションがある。後項が補助動詞「～し始める」の意味になる場合は、「動作」ということが前項動詞の担った役割であるため、「動作」から離れることはなく、意味の幅は非常に狭い。その二つの離れた意味をつなぐ役割を果たしていると考えられる、中間的な段階にある後項では、前項動詞は、いろいろな種類があるわけではないものの一つと限定されたわけでもない。これらの性質は、「～出す」だけの特徴ではなく、後項にある程度の幅をもつ複合動詞であれば、当てはまることなのではないか、という仮説はたてられる。これから、更に複合動詞の分析を進めて行く上で、今回分析で行ってきたことは、これからの論のとりかかりとして役に立つであろう。

また、「比喩化」という現象も非常に興味深い。複合動詞になったとき、単

独動詞にない意味をもつ、いわゆる「付属V」をどのように考えるかが、複合動詞を分析していく上で重要であると言われてきたが、「動作そのものではなく、その動作をするように」という比喩的な意味は、単独動詞にみられないことが多く、「付属V」といわれるものに属すると考えられる。この「比喩化」という現象も、これから複合動詞を分析していく上で、一つの観点となり得るだろう。

8. おわりに

今回は最初のとりかかりとして、「～出す」という複合動詞で分析を行って見た。「～出す」という複合動詞の全体像を見渡してみると、前項と後項の意味には連動性があるということが分かったが、このことが他の複合動詞にもあてはまるのか検証する必要がある。今回対象とした「～出す」という後項は、単独動詞と同じ意味から補助動詞化した意味まで、比較的広い意味をもつものであったが、「打つ」、「切る」などの同じような単独動詞から補助動詞としての意味をもつ動詞の他に、ある程度の意味の幅をもつ多くの複合動詞を分析していかなければならないだろう。今回は、後項が同じ動詞のものを集めてみたが、前項が同じ動詞というものも分析し、同じことが言えるかどうか確認するべきであろう。そのようにしていろいろな動詞を、同じように分析し、それぞれの複合動詞個々の前項と後項の関係を見ていくことで、複合動詞の全体像が見えてくるのではないだろうか。

〈参考文献〉

- 石井 正彦(1983)「現代語複合動詞の語構造分析における一観点」、『日本語学』8
—— (1983)「現代語複合動詞の語構造分析—〈動作〉・〈変化〉の観点から」、『国語学研究』23
—— (1987)「接辞化の一類型—複合動詞後項の補助動詞化—」、『方言研究年報』30
—— (1992)「動詞の結果性と複合動詞」、『国語学研究』31
奥田 靖雄(1983)「を格の名詞と動詞のくみあわせ」、『日本語文法・連語編』むき書房
呉 美善(1983)「「～だす」及び開始の意味を表す後項動詞について」、『ことは』4
斎藤 倫明(1984)「複合動詞構成要素の意味—単独用法との比較を通して—」、『国語語彙史の研究5』
和泉書院
—— (1992)『現代日本語の語構成論的研究—語における形と意味』、ひつじ書房
田辺 和子(1983)「複合動詞の意味と構成—「～ダス」・「～アゲル」を中心に」、『日本語と日本文学』3
寺村 秀夫(1969)「活用語尾・助動詞・補助動詞とアスペクト その1」、『日本語・日本文化』1
長嶋 善郎(1976)「複合動詞の構造」、『日本語学講座』4
中村 その子(1993)「現代複合動詞の多様性—比喩性との関連において」、『関東学院大学文学部紀要』66
姫野 昌子(1977)「複合動詞「～でる」と「～だす」」、『日本語学校論集』4
宮島 達夫(1978)『動詞の意味・用法の記述的研究』、国立国語研究所
山本 清隆(1989)「複合動詞の格支配」、『都大論究』21

《辞書類》

- 1972 『日本国語大辞典』 小学館
1986 『岩波国語辞典』 岩波書店
1989 『新明解国語辞典』 三省堂
1989 『基礎日本語辞典』 森田 良行著 角川書店